

聖書:エペソ人への手紙6章1~24節

説教:御霊によって祈りなさい

はじめに

今日の箇所も戸惑ようなことが書かれています。子どもたちには親に従えと言ひ、奴隷たちには真心から主人に従いなさいと言う。昔日本には国が定めた教育勅語というものがある、そこには親には孝行しなさい、国民は天皇に忠実に従ってよく働き、いざというときには国ために命を犠牲にさいと書いてあったそうです。聖書とよく似ている。教育勅語はとっくの昔に廃止になりましたが、聖書はいまだにこんなことが書かれている。そこで戸惑います。いっぽう新聞の人生相談の欄を見ると、親が子どもの育て方で悩んでいるとか、職場の上司のことで悩んでいるというような相談が常に寄せられています。偉い人でも本当の解決策がわからない。だから人生相談の欄は続いている。しかし聖書は神の真理ですから、ここに最終的な解決が書いてあることになる。いったいどんなことか。ともに考えてまいります。

## 1 従いなさい

### 1) 子と父親

そこでまず、子どもと父親に対して言われているところから見ます。まず1節です。「子どもたちよ。主にあって自分の両親に従いなさい。これは正しいことなのです。」そして4節。「父たちよ。自分の子どもたちを怒らせてはいけません。むしろ、主の教育と訓戒によって育てなさい。」

少し昔のことですが、ひところ家庭内暴力ということが問題になったことがありました。それである親がカウンセラーのところに相談に行き、こう言ったということです。「自分は子どもためになんでも与えてきた。それなのになぜ子どもが暴れるのかわからない。月にまでいける時代なのだから、ボタン一つで子どもをコントロールできるうまい方法はないだろうか。」そこで次に子どもに聞いてみた。「親は何でも与えてくれたのに、どうして暴れるのか。」そうしたら子どもは答えた。

「家には何でもある。けれどもたった一つ、ないものがある。家には宗教がない。」これはあるカウンセラーの方が書いた本に載っていた実話です。

「自分の子どもたちを怒らせてはいけません」とあります。だったらまず、なぜ子どもは怒るのかを考えなければならない。暴れたりする子どもを、よく「問題児」と言いますが、そのカウンセ

ラーは「問題児とは親の問題を指摘する子どもという意味です」とおっしゃっていました。子どもは敏感です。親が抱えている問題をきちんと見抜く。この子どもは「宗教がない」と表現しました。自分の親には子どもを育てる基準がなく、ものささえ与えれば喜んでくれるだろうとしか考えていない。それで子どもは混乱して怒る。そう指摘した。親には子どもを育てるしっかりとした基準が必要だということを表すエピソードです。

ではその基準と何かが問題となる。どこからか持って来た基準はたいてい偽物ですから、子どもにすぐに見抜かれてしまいます。本物の基準でなければならぬ。どこにあるのか。それが「主の教育と訓戒」、神のことばです。親がこの基準を信じて子どもを育てる。ダメなものはダメ。よいものはよい。子どもが泣いても暴れても絶対にぶれない。子どもはそのような親を信頼する。だから自然に従うようになるというのです。

では私はどうか。私が救われたとき子どもは幼稚園の頃です。それまで聖書の基準などなくて育ててきた。今思えば、子どもには大変悲しい思いをさせてしまいました。

### 2) 奴隷と主人

続いて奴隷と主人に対して言われていることを取り上げます。5節。「奴隷たちよ。キリストに従うように、恐れおののいて真心から地上の主人に従いなさい。」9節。「主人たちよ。あなたがたも奴隷に対して同じようにしなさい。脅すことはやめなさい。あなたがたは、彼らの主、またあなたがたの主が天におられ、主は人を差別なさらないことを知っているのです。」

今、職場のパワハラ行為は法律で罰せられるようになったとは言え、問題がなくなったわけではありません。上から無理難題を押しつけられて疲労困憊し、悲しいことですが過労死される方もおられる。そういう話しが一杯ある。それでも部下は従わなければならないのか。みな悩んでいます。私もかつて会社で働いていた時の上司のことを思い出し、いまでも夢に見ることがあります。それほどストレスを抱えていました。

いったいどうしたらよいのか。先ほど、子どもと父親のことを見ました。親が神のことばという基準をしっかりと持っているなら、子どもは何も

言わなくても親を尊敬し、従うようになっていく。それと同じように、地上の主人が神と同じように差別なく部下たちを扱うようになれば、人々は喜んで主人に仕えるようになるでしょう。実際、いま私が教えている神学校はこんな雰囲気がある。聖書は、決してありもしないことを語っているわけではありません。

とは言え、すべての会社が神学校のようなわけではなく、むしろほとんどが神を基準としていません。そんなところで働かなければならない。一体どうしたらよいのでしょうか。

## 2 戦い

### 1) 暗闇の世界の支配者

そのことを考える前に、そもそもなぜこの世界はこんなふう働きにくい所になったのか。最初からそうだったというのなら諦めるしかない。ところが聖書には、初めの世界はすばらしくよくて、人は喜んで働くことができたと書かれている。それがこんなふうになったのは、ご存じのようにアダムとエバが罪を犯したことで、この世界に悪が入ってしまったからです。その悪は今どのように働いているか。パウロは12節で言っている「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、支配、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天上にいるもろもろの悪霊に対するものです。」「暗闇の世界の支配者」とはなにか。「この世界は陰の政府に操られている」と、ある一部の人たちが主張していて、皆さんも聞いたことがあるかもしれません。大富豪がお金の力、陰の人脈を使って大きな国を操っている。そんなことのようにですが、聖書がここで言っているのは、そういうこととはまったく違い、ある意味ではもっと深刻です。ほんとうに「陰の政府」があるのなら、具体的にあのとかか秘密の組織があるのなら、結局人間のすることですから、そんなものはいつかはなくなっていくはず。

### 2) 邪悪な日のなかで生きる

ところが聖書で言っているのは、天上にいるもろもろの悪霊です。この悪霊たちが創世記のとき以来、この世界を邪悪なものにし、いまにまで続いている。それでも、みな一生懸命この世界をよいものにしたと願って努力してきた。けれども戦争や争いが絶えないのはなぜなのか。もっと身近なことを言えば、なぜ夫婦の愛は冷めて、互いに傷つけ合ってしまうのか。なぜ親は子どもを虐待してしまうのか。なぜ会社で働く従業員は幸せを感じるこ

とがでず、苦しんだり悩んだりしなければならないのか。最初の人であるアダム以来、この世界に罪が入り込み、その罪に対して悪霊が働くようになり、それでこの世界はねじ曲がり、邪悪なものになってしまったからです。私たちはそんな世界に生きている。生きるのがつらいと言う方たくさんいるのは当然です。心を病む方が増えてくるのも当然なのです。

### 3) 神の武具を身につける

邪悪な世界と聞いて、急に気味悪く感じたり身構えてしまった方もおられるかもしれません。大丈夫です。すでにこの世界で何十年も生きてきたのですから、別に緊張する必要はない。ただ、意識だけはすべきでしょう。私たちは悪霊を相手に闘わなければならない。もちろん素手で戦うのではない。武器がちゃんとあって、全部神が備えてくださっている。腰には真理、正義の胸当て、足には平和の福音、信仰の盾、救いのかぶと、御霊の剣、すなわち神のことば。どんな武器かと思ったら、なんのことはない、全部いままで聞いたことのあるものばかりです。

## 3 祈りなさい

### 1) 御霊によって

すでに武器は手もとにあるのでそれでオーケーか。いや、最後に大切なことを忘れてはならない。18節。「あらゆる祈りと願いによって、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのために、目を覚ましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くして祈りなさい。」

ポイントは三つあります。まず御霊によって祈ること。では御霊によって祈るとはどういうことか。簡単です。ふだん皆さんがしているとおり、そのまま祈ればよい。それが御霊の祈りです。

### 2) どんなときにも

二つ目。どんなときでも祈る。私たちはことあるごとに祈ります。嬉しいときも、悲しいときも、不安なときも、目の前が真っ暗なときも祈ります。でもあまりにもつらいことが起きたとき、自分では祈れないときもあります。どう祈ってよいのかとばも出ないときもある。

### 3) 互いのために祈り合う

それが三つ目。「すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くして祈りなさい。」私は祈れなくても、ほかの誰かが私のために祈ってくれる。これ

がキリストのからだである教会です。だれかが喜んで  
いるなら、ともに喜びます。だれかが悲しんでい  
るなら、ともに悲しみます。

#### 4) すでに主が戦っておられる

悪霊との戦いと聞いて、急に怖くなったかもし  
れませんが、でも安心してください。私たちが悪霊を  
倒すわけではありません。マタイの福音書12章18,  
19節にこうあります。「しかし、わたしが神の御  
霊によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう  
神の国はあなたがたのところに来ているのです。ま  
ず強い者を縛り上げるのでなければ、強い者の家  
に入って家財を奪い取ることが、どうしてできるで  
しょうか。縛り上げれば、その家を略奪できま  
す。」

イエスはすでに悪霊と戦い、悪霊のかしらを縛  
り上げている。今この世界で働いている悪霊はそ  
の下っ端に過ぎません。ですから私たちは過度に  
恐れる必要はない。神の武具がすでにあるので  
から自信をもってよい。ただし手強い相手である  
ことも確かです。だから私たちはともに祈りながら  
進んでいくのです。いったいどこに進んでいくので  
しょう。1章14節にこうありました。「聖霊は私た  
ちが御国を受け継ぐことの保証です。」

もし私たちが御霊によって祈っているなら、たと  
え目の前に多くの困難があったとしても恐れるこ  
とはない。御国に向かう道は主イエスの十字架に  
よってまっすぐに備えられています。主イエス・キ  
リストとともに歩んでまいります。